
闇のまた深く

うえざーにゆう～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇のまた深く

【Nコード】

N5735U

【作者名】

うえざーにゆう

【あらすじ】

人殺しとして生きていく素質を持ってしまった主人公。しかし異常なまでの正義感を持ち合わせてしまった主人公。彼が抱える心の闇が晴れるときは来るのか。様々な人間模様が渦巻く現代社会を生き抜いていく。

モノローグ

さて、俺は何をしていたんだろう。目の前には首の無い死体が5体。自分の左手には日本刀。ああ、そうか。俺は今暗殺部隊として潜入先で任務遂行中なんだ。やっぱり殺し、特に暗殺は気持ちがいい。気持ちが良いすぎて夢中になり記憶が飛んでしまうな。この仕事は危険故報酬もいいが金では得られないものが多く得られる。我ながらいい仕事を選んだものだ。

さて、なぜ俺はこんなにも曲がって揶揄た人間になっちゃったのだろうか。今27歳で本来なら会社員して結婚して家族がりのほほんと平和を満喫していたであろうに。それは遡ること27年前から始まった。

1984年9月28日、俺は生まれた。そして捨てられた……。拾ったのは40代半ばの綺麗な女性だった。

第1話

拾ったのは40代半ばの綺麗な女性だった。俺が物心ついたのは小学校4年生頃だった。これはきつと遅いだろ。名前は桜浩志らしい。らしい、というのは、捨てられたときに名前が書いた紙があったのだ。拾ってくれた女性は、将来本当の親と再会出来るかもしれないから、とその名前を使っている。…と後に教えてくれた。結果から言くと親は現れることはなかったが。まあ俺としては子供を捨てるような親に付けられた名前なんて願下げ、会うなんて真つ平ごめんだ。

さて、俺を拾い育ててくれた40代の綺麗な女性が高崎充穂さんという。とある小さな町でスナックのママをしている。ちなみに充穂さんは未婚だ。そもそも何故厄介この上ない赤ん坊を拾ったのだろ。うか。ちょうどその日充穂さんはある男性と会った帰りだった。昔愛し合い結婚を考えた唯一の男性だ。彼との間に3度子供を妊娠した。しかし3度とも生まれてくることはなかった。それから彼の両親からきつく当たられ結婚することもなく別れてしまった。そんな彼と久々に会った帰りに俺を見つけたのだ。放って置けなかったのと昔子供が欲しかった若かりし自分の思いが重なり拾ったのだと言う。それ以来一緒に暮らしている。俺から見て充穂さんは凄く良くしてくれる自慢の母親で尊敬している。スナックのママをしているので化粧は濃いめだがかなりの美人さんで友達には人気があった気がする。

小学校高学年にもなると充穂さんの店を手伝うことがたまにあった。お客さんからすれば女の子の方がいいと思うが男の俺でも「ありがとう」とか「一緒に座って話しよう」と気さくに声をかけてくれる人が多かった。いい人達だ。常連さんの中にビルというアメリカ人がいた。彼も充穂ファンらしくよく店を訪れては俺と話をしてくれた。そんな彼を俺は慕い英語を習った。半年もするとビルとは全

て英語でやり取り出来るようになり充穂さんや常連のおじさん達を驚かせた。

また常連さんの中に暴力団関係者もいた。ただ店ではそんな雰囲気を出さず“いいおじさん”だった。彼は俺に「男は強くならなきゃダメだ!」といつも言っていた。そんな彼に、1度学校帰りに会ったことがあった。その時は黒い車から出て来るところだった。周りにはスーツを来た人達が数十人いて皆一様に頭を下げていた。彼は俺に気がつく「おお、浩志君か。学校の帰りかい? 1度おじさんとこ来るか?」と聞いて来た。俺は「うん」と答えておじさんに付いて行った。この選択が自分の人生に大きな影響を与えることはまだ知らない。

第2話（前書き）

みなさんはじめまして。モノローグと1話では前書きを書く余裕が無かったので3話目にして初めて書きます。まず、慣れない執筆に苦勞し、初めての投稿で使い方に苦勞しました。作者のみなさん凄いですね。自分には向いていないのかも…と改めて思いましたf^_^
| ^:とりあえず、みなさんの暇潰しにでもなればいいと思ってます。よろしくお願いします。

第2話

おじさんの家は広がった。門には「鹿児組」と書かれた札があり玄関に行くまで広い庭を歩いた。ふと庭にある離れ家から声が聞こえてきた。

「おまえこれで何回目だと思ってんだ！」

「すいません！もう1度させて下さい！！」

「バカか！組長はもうおまえなんか処分しろって言ってるんだ！チャンスなんか無えよ！」

何故か興味を惹かれて、おじさんの傍を離れ小走りで離れ家に行った。窓越しではあるがそこで見たのは、5人から暴行を受ける1人の男だった。既に顔中痣と血だらけ。それを見た瞬間俺は頭が真っ白になったが、後から来たおじさんに

「浩志くん、…内緒だからね。さて、おじさんは彼に話があつてこの中に入るけど、浩志くんは家に先に行つてくれるかな？」

と言われた。真っ白になった頭が一気に醒めた俺はこう答えていた。

「俺も行く」

と。

おじさんは驚いたが、普段は使わない“俺”と言つたのでしばし考え手を取り中へ入って行つた。

「おつかれさまです！」

中にいた5人の男達は頭を下げ声を張り上げた。顔を上げて俺の姿を見るなり1番偉いであろう人が

「どうしたんですか？こんなとこに子供を連れてくるなんて組長らしくないですね。」

「こいつなかなかやるかもしれんぞ。そこにいるヘタレよりかは全然な」

「組長が目をかける子供って恐ろしいですよ」と笑う。

俺はそんな会話も耳に入らず血だらけで蹲っている男を見つめる。何だか身体が熱くなりじつとしていられなくなってくる。次第に手と足に力が入ってきて男に飛び掛かろうとする衝動と闘うようになっていた。その時おじさんから言われた。

「浩志くん、彼はね、一昨日200万円が入った売り上げ金を盗まれてね。おじさん困ってるんだよ。以前も50万円程盗まれたんだよ。どうしたらいい？」

俺はこう言った。

「殺しちゃえばいいんだよ。ついでに犯人も」

その場にいる大人6人は一瞬驚き次第に笑いながら

「組長の言う通り、やるかもしれないね」

と言い出した。蹲る男は明らかにうろたえていた。男は

「すいませんでした！もうしません！！命だけは…」

と何度も頭を下げ何度も言っていた。

俺はその時思った疑問を口に出した。

「もうしない、ということはどういうこと？盗んだこと？」

その場にいる全員が驚いていた。

「てめえ、どういうことだ！？」

「お前もグルなんだな？可能性は考えていたがやはりそうか」

「あ…いや……違うんです…これは…その……」

おじさんは

「仲間を吐かせろ」

と言うと俺に向かって

「浩志くん、ありがと。よく言ってくれたね。何かご褒美あげよう。何でも好きな物言っごらん」

と言ってきた。向こうではリンチしながら仲間を吐かせている5人

がいる。俺は言った。

「あの男を殺したい」

「…ほ、ホントかい？やめた方がいいよ」

「あの男はおじさんのお金を盗むような奴なんですよ？死んだらいんだよ。俺の手で殺してやる」

興奮状態でそう言った俺を見ながらおじさんはすぐ考えていたが、やれやれという風に壁にかけてある日本刀を手に取り鞘から抜き俺に渡してきた。

「ちよつと待つてな」

おじさんはそう言つと、リンチと尋問を繰り返している男達に近付いて行つた。何やら話をしていたがやがて終えてこちらに歩いて来た。

「浩志、覚悟はいいか？おまえは今から人殺しをするんだぞ？やめるなら今だぞ？」

「聞くまでもない」

と俺は答える。刀を握る手に力が入つて、男から離れていたが刀を振り上げていた。それを見ておじさんは

「しょうがない。充穂には内緒にし……」

全部言い切る前に俺は動いた。男まで5メートルはあつたが一気に間合いを詰め刀を振り下ろした。男の左肩辺りから右脇腹辺りまで刀が一閃。男は一瞬の出来事で驚き目を見開いていたが、やがて自分の体が切られたことに気付く。その時には体が2分していた。おじさんを含む組関係者6人は呆氣にとられ呆然と立ち尽くしていた。振り返り血を浴び日本刀をもつ小学生。非現実的な光景に大人達は言葉を失った。やがて正気を取り戻した者は死体の片付けを始めた。俺はおじさんに連れられ家のお風呂で振り返り血を洗い流した。興奮も冷めて頭が冷静になつてきても後悔も罪悪感も無かつた。あつたのは、達成感とまたしたいという欲求だけだつた。日本刀で人をバツサリ切るのには訓練がいるが自分は出来た、5メートルもの距離を一気に詰めることが出来た、それに躊躇なく殺せたことに満足しお風呂

を出た。お風呂を出ると、おじさんと先の部屋にいた偉いであろう男が話をしていた。

「思ってた以上だな」

「ええ、あんなの見たことないですよ」

「子供がバツサリ切りするかね」

「組長が目を付ける人間は毎度凄いです、今回別格じゃないですか」

「あれは使える。頼んだぞ」

「わかりました」

おじさん達は会話を終えると俺に近付いて来た。

「浩志くん、さっきは驚いたよ。おじさん達は仲間だからいつでもうちにおいで。彼は溝口といってここで2番目に偉いから彼に何でも言いなさい」

と言いつどこかへ行ってしまった。溝口と紹介された彼は

「よろしく、浩志くん。何でも遠慮なく言ってね。あ、そうそう、これ組長からのプレゼント。」

と言いつ1台の携帯電話を渡してきた。

「これでいつでも連絡できるからね」

鹿児組組長と若頭は俺を使える計算でいただろう。しかし自分達が抱える子供がとんでもない怪物であることはまだ気付いていない。そしていずれ手に負えなくなる。だがそうなるのはまだ何年も後のこと。

第2話（後書き）

自分で読み返してみて、…ヒドイと思いました。本気で投稿を考え
ましたよ。上手くなっていくのかなあ……………（-.-;）

第3話

「鹿兎組」で初めて人を殺した日以降度々訪れ殺人を楽しんだ。日本刀で殺すこともあれば拳銃で殺すこともあった。いつも「鹿兎組」で殺しを楽しんでいたが、次第に心が麻痺しもっと違う形で殺しを楽しみたいと思うようになっていった。

そんなことを考え出した俺も中学生になり、勉強に部活に恋愛に忙しい毎日を送っていた。しかしそれと同時に殺しから遠ざかっていることに苛立ちも感じていた。

そんなある日、サッカー部の練習が終わり帰っていると、
「キヤーーツ」

悲鳴が聞こえた。ただ事ではない雰囲気になり、急いで駆け付ける。すると暴走族風の若い男子4人が1人の女性に乱暴しようとしていた。2人は女性の両側に、もう2人は少し離れたところでバイクに跨がっていた。女性の両側にいる男達は

「お姉ちゃん、俺達とあそぼ」

「嫌です…」

「またまたあ。嫌がることしないって」俺達優しいので有名なんだよ」

「そうそう。紳士だからね」

「…いや…帰して…助けて…」

とうとう女性はへたりこみ泣き出してしまった。

俺は状況を瞬時に理解し走り出した。部活で散々走らされた後なのに足の運びは軽く音も少なく猛スピードで4人に近づいていた。気付いていない男達の、まず1番近くにいた女性の右側の男に飛び蹴りを浴びせる。前のめりになり顔から着地する。続いて左側の男にその勢いのまま右ハイキックを顎に入れる。昏倒し倒れる。その時

には少し離れたところにいた2人も気付き

「何だてめえ!!」

とありがちな台詞を叫びながら2人平行して走ってくる。俺は女性を庇う位置に立ち、まず向かって右側の男の左キックを右にかわし軸足（右足）を払う。男は倒れ尻餅をつく格好になる。続いてもう一人を…と思ったが、そいつは間合いを取りナイフを取り出していた。しばらくすると他の2人も立ち上がり手にナイフを持っていた。顎に蹴りをもらった男は意識が朦朧としているようでまだ立ち上がってはいなかった。その時俺は思った。チャンス!だと。正当防衛の名の元で殺しを楽しめるのだ。武器は何も無かったが奪えばいい。思考が殺しモードに入ると自然と体が動いていた。まず最初に飛び蹴りを食らわした奴に向かった。一瞬で間合いを詰め右ボティを入れると相手はひざまづき鳴咽する。そいつからナイフを奪い首を横から刺してやる。夥しい血が流れ出し血の池を作る。口からはゴボゴボと血が流れ出て来る。始めは苦しみ悶えていた男も次第に目の焦点が合わなくなり動かなくなっていく。それを見た2人は腰を抜かしその場にへたり込んでしまった。狩る側と狩られる側がはつきりした瞬間だった。逃亡しないように軽く拘束し、「鹿児組」組長からもらった携帯で溝口さんに連絡をした。状況を説明し死体の片付けと生きてる3人を「鹿児組」に移送してもらうことをお願いした。電話を切った後、2分ほどでワンボックスカー2台が到着し、片付けと移送を手早く行ってくれたので余計な目撃者を作らずに済んだ。あとは女性である。

女性は、今は泣いてはいないがへたりこみ泣いている状態から変わっていないかった。ただ状況が飲み込めず茫然としていた。俺が近づくこと驚き

「誰にも言わないから殺さないで」

と懇願してきた。俺が殺す気が無いことを説明し笑顔で手を差し延べると恐る恐る手を取り立ち上がった。この時初めてはつきり顔を

見たが、俺と同じ中学生ぐらいで髪は長く艶のある黒髪で目鼻立ちのはっきりした美人さんだった。それがわかると急に緊張してきたが、バレないように努力した。不信感満載ではあったがとりあえず家まで無事送って行き別れを告げた。

女性、いや女の子を家に送った後俺は「鹿児組」の屋敷へと向かった。待ちに待った残り3人の処刑を行わなければならないのだ。守ってもらわなければ生きていけない赤ん坊の時に捨てられたからか、何故か女子供に暴力を振るう輩は許せないようになっていた。その怒りをあの3人に知らしめなければならぬ。屋敷までもう少し。逸る気持ちを押さえつつ全力で走って行く。

第4話

屋敷に到着し地下にある処刑場と化している部屋に入る。そこには例の3人と溝口さんと組長と若い衆5人の計10人がいた。3人の拘束は解かれてはいたがこの面子に歯向かうことは無かったようだ。俺はただ単なるリンチ紛いの処刑にも飽きて来たので少し趣向を変えたいと常々思っていた。その旨を組長と溝口さんに言うと、

「浩志の好きにしてい」

とのこと。前からしてみたかったことをしてみることにした。

怯える3人に近づき日本刀2本と拳銃1つを渡す。訳がわからないといった表情で俺を見てくるのを無視しこれからすることの説明をする。

「今から生き残りを賭けて俺と殺し合いをする。武器は今渡したものだ。俺は日本刀。おまえ達3人が死ねば俺の勝ち、俺を殺せばそちの勝ちで無罪放免。拒否すれば今すぐ殺す。いいな？」

簡単だが17〜18歳にして命を懸けた殺し合いをするのに戸惑っていた。拳銃を持った1人が

「おまえを殺せば解放してくれるんだな？」

と聞いてきたので、俺は組長達を見て頷く。すると組長と溝口さんが顔を見合わせ

「わかった。約束しよう」

と言ってくれた。

俺は日本刀を抜き構えた。3人は、真ん中に拳銃、両端に日本刀という横並びの状態で約5メートルぐらいのところに立った。

始まりをどうするか、みたいな空気になったので、俺は

「先にどうぞ」

と言ってやった。驚いていたが目付きを変えてこちらを睨んできた。まず睨んできた拳銃男が1発発砲。撃つタイミングが丸分かりなの

で射線を右側に外しそのまま右の日本刀男に切り掛かる。そして首を横薙で跳ね飛ばす。噴水の様に血が巻き上がり天井が真っ赤に染まる。生首が5人の若い衆の近くへ転がって行き全員が息を飲んで固まっている。そして残る2人は目を見開いて驚き動きが止まる。そこで、もう一人の日本刀男に切り掛かるために拳銃男の横を摺り抜ける。今度はお腹辺りを横薙にする。内蔵を床にぶちまきながら夥しい血が流れ出る。あとは拳銃男。敢えて5メートル程間合いを取って拳銃有利な状況を作ってやる。

「あとおまえだけだが？」

「くそっ」

「この距離だと拳銃のが有利じゃないのか？おまえが動かないなら俺から動いて終わらせるぞ」

状況がわかったらしく拳銃を構え直し撃ってきた。俺は目線と銃口を見て日本刀の切っ先で弾丸の向きを少し変えてやる。男は驚いていたが2発目を発砲する。が、その前に射線から逃れ懐に入り左肺を刺し通してやる。左肺が収縮しなくなるので空気が吸えなくなる。すぐに刀を抜き右肺にも穴を開けてやる。これで空気を全く吸えなくなり悶え苦しみ窒息死することになる。痙攣し死にかけてる男の服で刀に付いた血と脂を拭って綺麗にして鞘に収める。弱い物を虐げるからこんな結果を招くのだ。当然だが、生き残りを賭けた闘いは俺の勝ちだった。死体が3体出来たが若い衆5人が手早く片付け血を拭き取る。天井に付いた血が掃除しにくそうだったが1時間程かけて綺麗になった。

今、2階の組長の部屋で、組長と溝口さんと俺とで話し合いをしている。

「浩志、あのゲームは勝つ自信があったからしたのか？」

「当然。日本刀があれば3人ぐらい何とも。しかも未成年の素人ですし。」

「しかし拳銃を渡したときは焦ったぞ」

「ははは、拳銃ぐらいなら目線と銃口で飛んでくるところはわかるし、トリガー引くタイミングも殺気や雰囲気のでわかるので大丈夫ですよ」

「そうなのか？ 凄いな」 （このガキとんでもないな。もしかしてヤバイ奴に関わってしまったか？ 今更どいしようもないが、今後のことを考えないとな）

組長の思いを他所に出されたジューズを飲み干す浩志。

溝口もまた浩志の能力に危機感を抱き今後の対応を考えていた。

（この殺人術を組の為に使わせられるのか？ 使わざるを得ない状況に持っていく？ いやそんなことをすればこちらが被害を被ってしまうだろう。…ではそれとなく他の組を巻き込むか。もしかしたら今回の3人組もどこかの組に属しているかも知れん。調べさせてもう少し暴れてもらうことにしよう）

数日後、例の3人組が「旭東会」と繋がりのある暴走族のメンバーであることが判明。「鹿児組」幹部は、浩志をどう使い「旭東会」を潰すか会議を行っていた。

旭東会は、構成員500人で鹿児組と勢力を2分するライバル組織。地方組らしく比較的平和に住み分けしていたが、最近組長に就任した東則夫がイケイケで、暴走族等若者集団を煽り揉めさせ、そこに介入し武力で収めて力を吸収し、さらに揉めさせ…というのを繰り返す武闘派集団である。その暴走族3人を消したのがわかれば「旭東会」は動くだろう。

浩志に恩を売りたい「鹿児組」としては自然な流れでいきいたいと考え、詳細は告げずに

「暴走族関係ともう揉めるなよ」

とだけ言つに留めた。

浩志も

「わかつた」

とだけ言つに留まつた。

第5話

3人の末端「旭東会」関係者を惨殺した1週間後の夕方19時頃。浩志は部活の帰りに、呼び止められた。

「あのー…すいません」

「ん？」

相手の顔を見て思い出す。ああ、この前3人組に絡まれていた女の子か。こんな時間に人通りの少ない場所で1人でいたらまた絡まれるぞ、と思いつつ見る。やはり美人さんだ。長い黒髪が似合う和風美女である。見とれていると

「この前は助けていただいてありがとうございました、ちゃんとお礼を言ってなかったの…」

「ああ、いいのに、そんなこと。ていうかこんな時間に1人でいたら危ないよ」

「へへへッ、実はさっきも男の人に声掛けられて焦ってたところなんです。でもあなたがいると思ってたので、何か不安はありませんでした」

「毎日この時間じゃないからあてにしちゃ駄目だよ。ところで何か用事でもあった？」

「あ…あの…名前も何も知らないので教えてもらえませんか？」

「俺？…俺は浜宮中学1年の桜浩志っていうんだ」

「へえ、桜くんだね。私は、山手中学1年の三枝光希です。同級生だね。よれしく。」

「同級生かあ、先輩かと思ってたよ。まあよろしく。学校も隣だしね」

自己紹介から他愛のない話をしつつ何となく打ち解けていく。帰り道を並んで歩きながら

（光希ちゃんかあ、可愛いなあ）

なんて思っていると、1台のワンボックスカーが隣で止まり後部スライドドアが開く。急に男が3人出て来て俺と光希ちゃんを強引に車の中に押し込んだ。いきなりのことに対応が遅れ身柄を拘束されてしまった。何としても光希ちゃんを守らなければならない。ていうか、こいつらは誰だ？運転手と助手席に1人ずつ、2列目に男3人、3列目に俺達2人が乗っている。車に押し込んだ3人のうち2人が俺と光希の頭に銃を向けている。手は拘束されてはいなかった。ので、わからないように右ポケットに入っている携帯の1番を押して通話ボタンを押す。溝口さんに電話が繋がる。通話状態のまま相手と会話を始める。

「あんたたちは誰だ？」

「は？黙ってる！ガキが！」

「俺達をどうする気だ？殺すのか？」

「心配か？まあ教えてやろう。俺達は旭東会だ。心当たりはあるか？」

「旭東会？いや、全く」

「おまえ、最近高校生4人組と揉めたる？ここまで言えばわかるだろ？」

「ああ…あいつら組員だったのか？」

「いや、組員じゃないがそれなりに厚遇してやってた連中なんだから、そいつらが消えたんで調べたらお前が出てきたってわけだ」

「じゃあ彼女は関係無いから放してやってくれ」

「出来ない相談だ。組長が女も連れてこいと言っているからな」

「じゃあとりあえず組長さんに会うまでは殺されることはないわけだ。ちなみに組事務所に向かっているのか？」

「まあな。ごたごたもみ消せるしな。つかガキのくせに肝っ玉座ってんな」

「どうも。褒め言葉と取つときます。一応言っとくが、彼女を傷つけたら許さないよ」

「フン、生意気言ってるじゃねえ」

という会話を溝口さんは携帯から聞いていた。すぐに組長に連絡が行き、「旭東会」事務所へ向かう準備を始めた。

一方、浩志達も「旭東会」組事務所に到着した。今更抵抗しても無駄なので大人しく付いていく。扉を開けて中に入ると、正面に恐らく東則夫と思われる人物がいる。目付きは鋭く雰囲気を持つ男に見えた。そして部屋全体には20人程の男達がいる。隣では俺の袖を掴み恐怖と不安に満ちた顔をしている光希ちゃんがいた。小声で光希ちゃんに

「大丈夫。何が何でも守るから」

と言っでやると、頷き少し笑顔を見せてくれた。さてどうするかな…。武器になりそうなものが欲しかったので事務所内を少し観察する。広さは結構広い。フットサルコートぐらいはあるのではないか。今は、出入口を背にした形で入口付近に立っている。相変わらず頭には銃が向けられているが。左手側には一面窓があり3階からの景色は意外によかった。向かい側は東組長がいて隣には若頭らしき男が立っている。その向こうの壁に日本刀が飾られている。右手側は壁でポスターやらグラフィックや表といったものが所狭しと貼られている。組員達はソファや机、椅子等に腰掛けこちららを見ている。今の所武器は日本刀か頭に向けられている拳銃ぐらいか。好きなのは日本刀だなあ、などと考えていると、組長の東が話し出した。

「おまえが洋介たちを拉致ったのか？」

（拉致？俺が殺したこと知らないのか？それとも罠か？最初が肝心だがどう持っていくか…）

敢えて無言という選択肢を選んでみる。

「答えられないのは答えてるのと一緒だぞ？おまえが拉致ったんだ

な？」

（んぐ、失敗。ここは正直に話した方がいい感じだな）

「拉致したのは俺じゃない。鹿児組だ」

「ああ、知ってる。じゃあおまえは何をしたんだ？あいつらはどこにいる？」

「カマかけたのか。4人の居場所は知っているが教えられない」

「何故だ？」

「俺の命がかかっているからだ。こんなガキが組の秘密を喋ると、命が無いのはあんたが1番よくわかるだろ？」

「じゃあ質問を変えよう。あいつらは何か喋ったか？」

（？喋る？何かバラされてはまずい秘密か何かがあるのか？）

「知らない。尋問は俺がしたんじゃないからね」

というとき東組長と若頭がコソコソと話をしだした。暫く話してからこちらを向き直し

「おまえは鹿児組とどういう関係だ？」

「知り合いのおじさんが組長で子供の時から可愛がってもらってた。ヤクザってのも最近知った」

「じゃあとりあえずおまえら鹿児組の餌になれ」

というとき20人も男達が動き出した。捕まっては打つ手が無くなるので、頭に向けられた銃を奪う。左手で拳銃のスライド部分を押しさえ右手で銃口をもち捻ってやる。相手はいきなりで対応が遅れ銃を放してしまう。奪うなり頭に1発撃ち、光希ちゃんの頭に銃を向ける男の頭に1発撃つ。光希ちゃんに

「逃げる！！」

とだけ言うとき向かってくる男達の頭を撃っていく。何発か外したが、10人程殺した時点で向こうも物陰に避難しだした。なので光希ちゃんの頭に銃を向けていた男から銃を奪い俺も隠れる。敵は残り10人と組長と若頭。恐らく全員銃で武装。少し分が悪い感じ、だと普通は考えるだろうな。だが俺は迷う事なく隠れている場所を出ていつもの超人的瞬発力で一気に移動し銃を撃つ、一気に移動し銃を

撃つを繰り返し反撃の間を与えずに殺していく。そして残りは組長と若頭になった時組長が

「おまえが鹿児組の殺し屋か？洋介達もお前が殺したんだな？おまえ、俺達を馬鹿にしたな！ヤクザナメるとどうなるか教えてやる！」

と怒鳴ってきた。物陰から出て来た東組長は手にマシンガンを持っていた。さすがにマシンガンの弾は先読み出来ない。慌てて柱の陰に隠れる。そこにこれでもかというほどの弾が浴びせ掛けられる。しかし弾切れを起こしマガジン交換するためにしばし反撃の間ができる。それを利用し、まず組長の隣で拳銃を撃ち援護している若頭を狙う。初弾を先読みしかわしたあと、蛇行して続く弾をかわしつつ間を詰める。左手で拳銃を弾き右肘で鳩尾を突く。鳴咽しながらうずくまる若頭の側頭部に左足で蹴った後壁に掛かっていた日本刀を取り鞘から抜く。そのまま若頭の首を切り落とす。血が吹き上が隣りの組長は血のシャワーを浴びた形になってしまふ。マガジン交換も終わっていたが右腕であった若頭の首が飛び血のシャワーを浴びたことで固まっていた。俺はとりあえずマシンガンを持っていた右手を切り落とすことにした。

とその時入口が開いた。入って来たのは「鹿児組」の面々。拳銃や短刀を持っている若い衆が最初に入って来たが、生きてる「旭東会」が東組長だけとわかると組長と溝口さんが入って来た。

「浩志無事みたいだな。女の子は保護したぞ」

「ありがとうございます。旭東会の組長はどうします？この前の4人の件で何か隠してる感じなんですよ」

「ああ、多分麻薬か何かだろ。なあ東？」

「.....」
「答えないなら手足を斬っていくがどうする組長さん？」

「.....」
黙ったままなので左腕を切り落としてやった。流石に武闘派の組長、叫び声は上げずこちらを睨んできた。しかし観念したのか話し出し

た。

「……あ、あいつらは…俺達が手に入れた大麻を若者達に売っていた。ヤクに染まった男は揉め事に使って、女は風俗やイカれた奴に売ったりした。あと揉め事を作って組が介入しやすいようにもしていた。だから短期間でここまでになったんだ」

この話を聞いて怒りを覚えた俺は思わず右足を切ってしまった。世の中力が無いやつは好いように使われるのが現実だが、それでも弱い立場の人間を堕としめるやり方は好きじゃない。だから反射的に斬ってしまったのだ。東組長は両手右足を失い流血で意識が薄れてきているせいかぐったりしてきた。

ほとんど聞きたいことは聞いたのもう死んでも構わない。あとは事後処理だが「鹿児組」が何とかしてくれるだろう。現にすでに片付けが始まっている。あとは任せて俺は光希ちゃんの所へ向かった。

第6話

「旭東会」組事務所を出て階段で1階へ降りていくと、階段の脇で光希ちゃんが待っていた。

「大丈夫だった？」

と聞くと、いきなり抱き付いてきて

「大丈夫。けど桜くんが心配だった…」

と涙をこぼしながら言ってきた。こんなことは初めてだったのでうしていいかわからなかったが、とりあえず抱きしめてあげた。暫くすると落ち着いたみたいで、俺から離れた。顔色をうかがっていると顔を赤らめ下を向いてしまった。そんな状態の時に組長と溝口さんが降りて来た。

「おつ、若い男と女がいい雰囲気になってるなあ」

と組長が茶化してきた。

「そうですか？まあこんな可愛い子ならいいですよね」

と乗っかってみる。隣では光希ちゃんがさらに俯く。まあこんなところだろ。

さっきまでの軽い会話を終え、今後の「旭東会」について聞いてみた。

「旭東会は、いきなりライバルに頭を潰されたんだ、鹿児組に入れと言われて簡単にいくわけがない。だから旭東会内で新しく頭を決めるようになった。とりあえず新しい頭はうちに挨拶に来ることと今回の件での戦争吹っ掛けは無しということを約束させた。他は今までと一緒に」

とのことだった。まあ、俺はマシンガンや拳銃にも立ち向かえることがわかったからいいけどね。

つと、もう日付が変わってしまってる。早く光希ちゃんを家に送らなければ。

「もうこんな時間。早く家に送るよ。てか俺が車運転するわけじゃ

ないけどね」

「ありがとう。でも家に誰もいないから急がないよ」

「親は旅行？」

「ううん。去年事故で死んじゃった。親戚の家に行くことになってただけど、嫌いな人達だったから断ったの。幸い家のローンは終わってたし保険金も入って来たから中学3年間はやっていけると思う。だから1人なの」

「そうなんだ。じゃあ家に来る？俺も親いないけど一緒に暮らしてる母親代わりの元気な人いるよ」

「うーん…、…1人寂しいしお邪魔しようかな…」

「じゃあそうしよう。溝口さん、俺ん家までお願いします」

と運転していた溝口さんに言った。

「了解。…とうとう浩志も男になるのか」

「若いつていいなあ」

と組長と溝口さんは大笑いしている。後部座席で俺達2人は顔を見合わせた後下を向いてしまった。

家に着くと充穂さんが出迎えてくれた。組長が予め連絡してくれてたみたいだ。心配したみたいだが無事であることを喜んでくれたし、女の子を連れて帰ったので驚いてもいた。組長と溝口さんにお礼を言い別れた。

とりあえず、遅いご飯を軽く食べながら充穂さんに光希ちゃんを紹介した。食べ終わる頃には2人は打ち解け冗談を言いながら笑い合っていた。俺は2人を残しお風呂に入った。上がったもまだ盛り上がっていたのでもう寝ることを告げて部屋に向かう。疲れていたのかベッドに横になるとすぐに寝てしまった。

朝起きると違和感を感じたので横を見ると、光希ちゃんが寝ていた。何が何だかわからず慌てていると光希ちゃんも起きて「おはよう」と一言。

「お、…おはよう。な…何故この布団の中に…？」

「充穂さんが、うち布団無いから浩志と一緒に寝なさい、って…」

（ん、普通の親子なら有り得ないと思うが、普通じゃないからいいのか…？）

「あ…そう…」

何もして無いので堂々としていよう、と自分に言い聞かせ1階に降りて行くと充穂さんが朝ご飯を作っているところだった。

「おはよう。ご飯もうすぐ出来るよ。昨晚はどうだった？」

「どうって？」

「光希ちゃんによ」

「俺寝てたから何も」

「残念ね」

…何という保護者だ。呆れて言葉も出ない…。

3人で朝ご飯を食べた後、俺達は学校へ向かった。学校の方向が逆なので家の前でお別れになる。

「じゃあまた」

「うん。ありがとう。…あの…、今日も来ていい？」

「いいよ。じゃあまた夜。いつてらっしやい」

「ありがとう。じゃあ夜に。いつてらっしやい」

学校に着くと、いつもの友人達といつもの日常を過ごしていく。

第7話

授業も部活も終わり光希ちゃんがいるであろう家に帰る途中、いきなり8人組に囲まれてしまった。制服を見るとうちの学校のもの。雰囲気からすると3年生か。

「い、いきなり何ですか!？」

とりあえず、か弱い1年生を演じておく。

「1年の桜だな?ちよつと付いてこい」

とだけ言つと、歩き出した。暫く付いていくと、1台の高級車のところに案内された。すると中から男が3人現れた、先輩達のリーダーらしき人と話をしだした。こちらの都合を無視した一連の出来事にイラツとしながら待っている、男達3人が近付いて来て左の男が

「お前が桜か?」

ここまできて横柄な態度。嫌いだ。

「そつですが何か?」

ちよつと不機嫌な感じで返事をする、先輩が、

「何だお前!その態度は!？」

先輩だが一応睨んで牽制すると、真ん中の男が

「いいんだ。俺達は『安生組』の者だ。鹿児組組長から君の話を聞いてね。ちよつと手を貸して欲しくて来たんだ。話だけでも聞いてくれないか?」

またヤクザ関係か。人殺しは好きだが鹿児組以外のヤクザと付き合いが深くなるとややこしくなるから嫌なんだよなあ…。けどこの雰囲気は…逃がしてくれない感じた。

「わかりました。手短によろしく」

「ありがとうございます。しかし手短か…。隣町の『片岡組』がうちの組を潰そうとしているんだよ」

「ははは。流石に手短か過ぎますよ。…わかりました。ちゃんと聞きます」

「じゃあちよつと移動しようか」
面白い人だ。一瞬にして和んでしまった。今までの組関係の人とは何か違う。

連れて行かれたのは、なんと「鹿児島組」の屋敷だった。溝口さんが出迎えてくれた。俺の知らないところで話が進んでいるのが気になる。ちなみに先輩達とは先の現場でお別れしている。

通されたのは、組長の部屋だった。俺と組長と溝口さん、そして安生組の若頭の4人だ。組長はいつになく険しい顔をしている。張り詰めた空気の中安生組若頭が口を開いた。

「鹿児島組組長ありがとうございます。桜くんもありがとう。事態の説明をさせていただきます。…今日のことなんです。昨日の旭東会の惨事を知って片岡組が動いた結果なんです。旭東会の麻薬ルートや売春やポルノDVD販売を乗っ取る思惑のようです。ポルノはともかく麻薬ルートや売春は旭東会の独自のものだったので片岡組はどうしても欲しかったのでしよう。ですが、麻薬ルート、特に販売についてや売春の人材確保と斡旋は東組長が極秘で扱っていたようなんです。以前こちらでも調べたことがあるんですが、いくら調べても一切出て来ませんでした。鹿児島組でもそうだったようですね？」

「ああ。昨日東に聞いたが結局わからずだ」

「しかし、東組長が直接指示して実行していた人間がいたことが先程わかりまして…」

「誰だ？……まさか!？」

「そうです。桜くんと揉めた高校生4人組です。彼等が、麻薬で墮として使える若い男女を見つけていたようなんです」

（だから東組長は俺に4人組が何か喋ったか聞いてきたのか）

「余程信賴していたんでしょう。証拠が残らないような形で進めて

いました。しかし、桜くんと鹿児組によって消されました。片岡組は、鹿児組や鹿児組と付き合いのある安生組を手に入れることが旭東会のルート乗っ取りの最善の方法と考えてもおかしくない。そんな状態なんです」

「事情はわかりました。で、俺にどうしろと？」

「片岡組に奇襲をかけるのが最善でしょう。今片岡組は数十人程で安生組組事務所を襲撃しているはずですよ。その時に鹿児組が襲撃すればこちらの被害は少なくて済むはずです。桜くんには先着して偵察と暗殺をお願いしたいんです。」

「今安生組が襲われてる！？行かなくていいんですか？」

「組長がこっちは何とかするから先手を打てるように動け、と」

「なるほど。俺を信用していいんですか？得体の知れないガキですよ？」

「確かにそうだね。しかし勢力の小さい安生組の現状は厳しい。君と鹿児組に頼らざるをえないんだ。よろしく頼む。ちなみに片岡組は今50〜60人ぐらいいると思うから気をつけて。あと無茶をする若い衆が沢山いるから」

「わかりました。暗殺は初めてなんで上手くいくかわかりませんが、何とかやってみます」

片岡組の事務所が入る5階建ての雑居ビルまで鹿児組の若い衆に送ってもらった。さすがに無茶を沢山して大きくなっただけありビルすべてが組の持ち物だった。中には中古雑貨販売店、貸金屋、工務店、人材派遣会社等の事務所が入っているようだ。5階が片岡組の事務所だと聞いている。ゲームみたいなシステムだ。俺は、鹿児組から持ってきた拳銃をベルトに挿し、日本刀を背中の中ナツプサックに入れて拳銃の予備弾倉も入っていた。ほんと日本刀だけでよかったのだが、片岡組50〜60人全員が銃で武装してるはずだったので拳銃も持ってきた。

1階は中古雑貨販売店だったが時間が遅いのでシャッターが閉まっ

ている。その右手に扉があり奥に階段がある。中に入り確認しても誰もいなかった。中古雑貨販売店に繋がる扉にも施錠されており中に人がいないことを教えている。ここで鹿児組と安生組若頭にメールをする。「今の所1階は無人。2階へ進む」と。

2階へ到着。扉は3つ。通路左側に工務店、通路突き当たりは空き店舗、通路右側は貸金屋になっていた。

工務店からも貸金屋からも声が聞こえない。電気が点灯しているの
で人はいるのだろうが、お客さんがいないか真面目に仕事をしている
かだ。しかし本来誰もいない空き店舗からは怒鳴り声が聞こえて
いる。

「いつになったら金返すんだ！？よく返さずに貸してもらいに来る
な？いくら貸してるかわかってんのか？1500万だぞ！？何に使
ってんだ？今日は帰さねえぞ」

「……………」

貸金屋が尋問の部屋として使ってるようだ。雰囲気からして5人ぐ
らいかな。まずこれから片付けるか。その前にまたメールする。

「2階突き当たり空き店舗にて男数人が1人をリンチしている模様。
突入する」

第8話

今は階段を上がったところ。突入のメールをした後すぐに貸金屋店舗内から声が聞こえた。

「あとは一人で出来るから、おまえあっち手伝って楽しんでこい」
「えっ、いいんですか？じゃあ行つてきます」

ここに居ては見つかってしまうのでとりあえず階段を数段降りて様子を伺う。すると扉が開いて1人の男が奥の空き店舗へ向かう。中に入ったのを確認して状況を整理しなおす。

（空き店舗には恐らく5、6人、工務店は今は不明、貸金屋には1人。貸金屋から片付けた方がいいな。）
また報告する。「変更。貸金屋に男1人。先に片付ける」と。

まず客の振りして様子を伺うことにする。何かあれば斬ればいいだろう。

「すいません」

「あ、はい。すいません。もう営業終了してまして…」

「そうなんですか……」

と言いながら部屋の様子を観察する。広さは大体コンビニぐらいか。事務所として普通の大きさだろう。扉を入れて直ぐにカウンターがあり事務所内に客が入らないように仕切られている形になっている。高さは1m弱つてところか。その向こうはデスクが沢山ある。ヤクザが経営しているにしてはしっかりしている印象だ。1人いる男も40代のがつしりした体格だが威圧する感じの無い普通の男に感じた。その男がこちらに歩いて来た。

「何かお困りですか？」

「えっ…と、その……」

と言いにくそうにしていると

「お金…ですか？」

と聞いてきた。俺は黙って頷く。すると

「わかりました。こちらへどうぞ」

と奥の仕切られている部屋に案内される。恐らくお客さんと個人的な話をする時に使う部屋だろう。これでカウンターを越えることは出来た。後はこの男を片付けるだけだ。

「さて…と、失礼ですが、お歳は？」

「13歳です」

「法律で未成年にはお金を貸せないことになっているんです。ご両親はこのことご存知ですか？」

「いいえ」

「そうですか。言えない理由が？」

「はい…」

「わかりました。条件が厳しくなってもいいですか？」

「はい…」

「法律違反なので秘密に出来ますか？」

「はい…」

「では書類を取って来るので少々お待ちください」

と立ち上がって後ろを向いたところで俺が動く。背中のナップサックから日本刀を鞘ごと抜き後頭部を殴る。男は膝から崩れ落ち意識を失う。動かないように両手両足を縛り猿轡をする。トイレの個室に引き擦って行きそこで頸動脈を切ってやる。吹き出ない程度に加減すると体を伝って便器内に血が滴るようになり発見が遅れしかも静かに死んでいく。面倒臭いが、誰にも気付かれないように殺していく必要があるのでは仕方がない。トイレから出ようとノブに手をかけたとき、貸金屋店舗の扉が勢いよく開く音がした。そしてこちらに走ってくる。空き店舗にいた男がトイレに来たようだ。俺は入口ドアの裏側に隠れ日本刀を鞘ごと構える。するとドアが勢いよく開きこちらを見る事なく小便器へと男は向かった。便器の前へ辿り着く前に後頭部を殴る。20歳ぐらいだろうか、ガタイのいい兄ちゃ

んは殴るだけでは倒れることも意識を失うこともなかった。

「つつ…、てめえ、何者だ？」

倒れると思っていたので焦ったが、日本刀を抜き一瞬で首を切り落とす。血が吹き上がり天井も床も血だらけになってしまった。これで、急ぐ必要が生じた。この男がこのトイレを使ったことから空き店舗内にいる男達もここを使うだろう。そうなれば敵がいることがバレてしまう。急いで空き店舗に向かうことにした。

貸金屋を出て奥に向かう。空き店舗からは相変わらず怒声と殴る蹴る音が聞こえる。中がどうなってるかわからないので少し開けて覗いてみる。バレたらすぐ斬れるように日本刀は抜いておく。扉を少し開けると、入口から中が見えないようにカーテンで仕切られていた。見つからないように中に入る。そしてカーテンの隙間から中を覗く。中は貸金屋と同じくらいの広さだが、置いてある物が少ないので広く感じる。壁はコンクリート打ちっぱなしで冷たい印象。窓は遮光カーテンらしき黒いカーテンが掛けられていた。そして真ん中辺りで男が1人蹲りぐったりしている。その周りに6人の男。さらにその奥にベッドがあり撮影機材がありベッドの上でレイプが行われている様子を撮影していた。

「奥さん、旦那死んじゃったみたいよ。これからは俺達と楽しむうね」

ぐったりしている男の妻が、旦那の借金故こんなことに巻き込まれているらしい。ベッドまで距離はあったが、一瞬で移動しレイプしている男の首を撥ね、ビデオを回してる男を胴体から真っ二つに切る。ついでにレイプを見物していた5人の男を次々と真っ二つにしていく。7人を14のパーツに分け終わった時、中央辺りにいた6人が気付いたが、一瞬で移動し12のパーツに分けてやった。借金男の様子を見ると、顔中腫れ血だらけになっている。一応生きてはいるが虫の息だ。そして女の様子を見に行く。レイプのショックもあるだろうが目は虚ろで放心状態。首を斬られた男の血を全身に浴びているので仕方がないが。声を掛けても反応は無いので後は鹿兎

組に任せる。

ここで現状を報告する。「貸金屋店舗トイレで2人始末。その後奥の空き店舗にて13人始末。男は虫の息。至急病院へ。男の妻らしき女がレイプされていたので保護。放心状態なので置いていく」すぐ返信があった。「了解。今ビルの下。合流するか?」「今すぐ行く」返信をした後、日本刀の血と脂を拭って鞘に仕舞い背中の上ツブサックに入れる。そして外に向かう。とその時、

「助けて……………」

と女の声がした。大きな声を出されては困るのですぐに傍に行く。

「大丈夫ですか? 助けます。見つかるので声は静かに」

と人差し指を口元に持って行き、しーっ、というジェスチャーをする。女は頷く。強い女性だ。俺は鹿児組の溝口さんに電話をする。

「女性の意識がはつきりました。2人よこしてください。工務店に気をつけて」

「わかった」

2分ほどして溝口さんと安生組若頭が来た。若頭が女性を介抱して俺と溝口さんで工務店を制圧しに行くことになった。

工務店の扉に耳を当てるが物音一つしない。とりあえずノックをすることに。「トントン」ノックをしても反応はない。ノブを回し中に入ると、誰も居なかった。隠れている人がいないか探すと、奥の部屋に女性が2人怯えてこっちを見ていた。

「殺さないで……」

と目に涙を溜めながら呟く。俺は日本刀を鞘に収め女性に笑顔を向け質問する。

「この店には貴女達2人だけですか?」

「は、はい……」

「怯えなくていいですよ。僕たち5階に用事があるんです。3階と4階と5階について教えて貰えませんか?」

「3階は人材派遣会社の事務所だけです」

「どの部屋ですか？」

「手前の右側です」

「その他2つの部屋は使っていない？」

「いえ、たまに使ってるようですが何に使ってるかは……」

「4階は？」

「4階は全て空き店舗です。ただ……」

「ただ？」

「ただ、ポルノ撮影に使ったり拷問に使ったりしてるみたいです」

「ああ、言いにくいこと言わせてすいません。あと今このビル内には何人ぐらいいる？」

「さあ？3階はまだ仕事してるはずなので人はいると思います。5階は常に20人はいますよ」

「ありがとうございます。もう帰った方がいいですよ。あとこの事は内密に」

と言って2人を帰す。情報収集も出来たので空き店舗へ戻って男とその妻を外に連れ出す準備をする。男を溝口さん、女を若頭が背負い静かに1階に下り外の車に乗せる。車が発し残されたのは俺と溝口さんと若頭と鹿兎組4人。これからのことを相談して、俺以外は2階で待機し1階から上がってくる人間を仕留め、俺は1人で3階を制圧することに決まった。

2階で皆と別れ3階へ向かう。造りは2階と同じである。左側と奥が空き店舗、右側が人材派遣会社。

人材派遣会社の扉の前に立ち耳を当て中を探る。声も音もしない。すると、左側の空き店舗の扉が開き男が2人出て来た。最初に出て来たのは40代のいかにもヤクザって感じの男。続いて出て来たのは20歳そこそこの金髪で頭の悪そうな男だった。

「誰だ、お前？」

と40代の男が聞いてくる。

「あ。えと……」

再び貸金屋での出来事みたいに演技をしなければいけなくなる。

「お前、血の匂いがするな。何者!？」

といきなり拳銃を向けられる。若い方はあたふたしているだけで何も出来ないでいた。拳銃なんて怖くないが、撃たれてはバレてしまうので拳銃を何とかする。相手の懷に飛び込み両手で銃を上捻る。すると右手から銃が外れ俺の手の中に。叫ばれては意味が無いので、まず若い方を拳銃で殴り気絶させる。そして40男の頭を両手で持ち思いつきり捻る。頸椎が折れ男は死んだ。だが、一連の音が聞こえたのか人材派遣会社から人が出て来た。次から次へと問題が起きる。暗殺って難しいと心の中で愚痴る自分がいた。

第9話

人材派遣会社から出て来た男と目が合ってしまった。俺の足元には、首が変な方向に向いた男と気を失い倒れてる男がいる。敵だと判断される材料が揃っている。即敵と認識した男は胸元に手を入れ拳銃を取り出した。銃口を俺に向け引き金を引こうとする。しかしそれより前に銃を持っている右手を切り落とし、返しに首を切り落とす。入り口ドアや通路天井・床、店舗天井・床などそこら中に血飛沫が散ってしまった。すると店舗奥から

「ごらあーっ！！！！！」

と大声が聞こえ続いて発砲音が聞こえた。

（くそっ！結局バレた。こうなったら強引に皆殺しだな。これから何も気にせず楽しもう。暗殺は疲れたし面白くないし）

微かに5階から怒声と大勢の人の足音が聞こえた。とりあえず3階だ。人材派遣会社内の男が銃を構えていたので一瞬で間合いを詰めて両手両足を切り落とす。悲鳴の後呻き声を上げながらのたちまわる。出血が酷いので放置していても死ぬだろうが、とりあえず銃を奪い頭を撃つてとどめをさしてやる。店舗内は制圧完了なので、携帯を取り出し溝口さんに電話しつつ、拳銃を構えながら3階と4階の間の踊り場に向かい上を警戒する。

「バレちゃいました」

「知ってる。お前が撃つたのか？まあいい。で、これからどうする気だ？」

「俺じゃないです。とりあえず人材派遣会社には人はいません。他の2部屋の搜索を鹿児島組にお願いします。俺はこのまま5階まで上がって皆殺しにします。」

「わかった。今から皆で3階人材派遣会社に移動する」

3階と4階の間の踊り場で銃を構え待っていると、5階から4階へ

片岡組の数名が走って下りて来た。姿が見えたところで銃を撃ち動きを止めさせる。3人が倒れ傷口を押さえ後退する。4階から銃が撃ち込まれ出したので踊り場から数段階段を下り隠れる。そこで銃を仕舞い日本刀に持ち替えて深呼吸する。発砲音からすると10人もいないだろう。とりあえず4階へ上がって全員の首を撥ねることにする。

一瞬で4階に上がると皆一様に驚いた顔をしていたが近くに人間から首を撥ねていく。結局13人もいた。一面血溜まりで血の匂いが充満している。目と口を大きく開けている生首、まだ痙攣し血溜まりに小さな波紋を作っている死体など異様な光景が広がっていた。その中を5階へ上がっていく。途中溝口さんに連絡を入れ4階の搜索をお願いした。

5階には1つしか扉が無かった。中からは殺気が感じられたが、構わず扉を開けた。すると正面に片岡組の組長らしき50代の男がおりその周りに10人が立っていた。

「お前が鹿児組の殺し屋か？」

と組長は尋ねてきたので、俺は

「鹿児組に世話になつてる殺人狂だ」

と半分冗談で返してやった。

「フン、うちの組を潰してもその上の組に睨まれるだけだぞ。これからどうする気だ？」

「そうなたらまた皆殺しにするだけだ。そもそもそっちから仕掛けてきた戦争だろ？降伏するか皆殺しになるかどっちかだ！」

と言い俺は銃を構える。片岡組の10名全員が同時に銃を構える。組長だけが余裕があるように両手を広げて挑発してくる。少タイラツとする。と同時に日本刀を抜きつつ組長の眼前まで一瞬で移動してやった。そして、腰辺りを横一閃にする。すると組長は両手を広げたまま上半身と下半身がバラバラになる。しばらく本人は斬られたことに気付くことはなかった。しかし、上半身がドサリと床に落

ちた時に気付いた。内蔵が床に散らばり生暖かい自分の血に浸っているのだからそのショックは相当なものだろう。言葉にならない悲鳴を上げていた。周りは啞然として固まっていたので10人全員その場で切り捨てた。組長には聞くことがあったとは思ったが、あの人を馬鹿にした仕草を見過ごすことは出来なかった。まだまだ子供だった。

すべてが完了した後溝口さんに連絡し5階に来てもらう。

「組長殺したのか？聞きたいことがあったんだが」
とイヤミを言われる。

「すいません。カツとなっちゃいまして…」

「まあいい。4階に2人生きてたからそいつに聞け。後はやつくから帰っていいぞ」

と言われた。階段を下りていると、2階で安生組若頭が待っていた。「桜くん、おつかれさま。助かったよ。また改めて伺うよ。今日はゆっくり休んで」

と言ってくれた。何だか嬉しかった。

鹿兎組の屋敷に戻りシャワーを浴びて帰宅する為車で向かっている途中、今日のことを考える。

あのビルの中には見るも無残な死体が山程出来ていた。当初は暗殺目的だったわけだが、途中からは殺しを楽しむ為に行動した。そうなるからは確かに集中力が増し動きにキレが出て来た気がする。自分には堂々と正面から殺しにかかるスタイルが合っていると感じた。一方、暗殺は行動に制限があり知識と技術がいる仕事で訓練が必要だということもわかった。正直神経を使う暗殺は合っていないと思った。そんな自分が将来暗殺を仕事にするとはこの時は思ってもみなかった。

鹿児組でシャワーを浴び帰宅する頃には、日付が変わってさらに時間が過ぎていた。帰宅すると光希ちゃんが迎えてくれた。溝口さんが充穂さんに連絡して、充穂さんが光希ちゃんに…というところだろう。何をしてきたかを大体知っている様子で無事を喜び顔を綻ばせていた。自分では死ぬはずがないと思っているが周りはずではない。命のやり取りをしているので心配しているらしい。

今回は神経を使ったので疲れてはいたが中々眠れなかった。自然と今日の反省会を頭の中でして「あの時こうしてれば…」「この時にはこう動いていれば…」と考えていた。それを隣の光希ちゃんは気付いていたらしく

「眠れない？」

と尋ねてきた。

「あ、ごめん。邪魔した？なんか色々考えて眠れなくて…ね」

「ううん、いいの。けど大丈夫？人を殺すのって罪悪感ない？」

「これがまた全くないんだ。罪悪感どころか楽しかったりする。軽蔑する？」

「んー、軽蔑じゃないけどちょっと普通じゃないとは思うかな。でもそのお陰で私も助かったわけだし何も言えない」

「確かに普通じゃないだろうね。けどいいんだ。どうせ人はいつか死ぬんだし、したいことをすればいいんだよ。俺は悪人を殺して少しでも暴力を無くしたいから殺しているだけ。殺しは生きる目的なんだよ」

「ふーん……」

少し付いて来れなかったみたいだ。学校で、人間は進化したと教えられた。たまたまの偶然で人になってきたらしい。そうであるなら生きる目的や存在意義は自ら見つけなければならぬことになる。

それが自分には人殺しなだけで、金持ちになることや有名になることと一緒に思っている。それが光希ちゃんには伝わらなかった。

次の日、学校が休みだったので朝から鹿児組の屋敷に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5735u/>

闇のまた深く

2011年10月8日14時40分発行